

緑法人会 健康 講話

今回の健康講話は講師に絹木憲司先生を迎え、11月28日に「介護の実態とその対処法」を演題に中山の「花むら」にて開催された。

絹木先生は、生まれも育ちも横須賀で、現在の住まいは横浜線の相原だが、勤務地が埼玉なので現在は単身赴任をしているという話から始まった。

先生は年齢が50歳近くになって、地図の小さな文字が読めないなど老化現象を感じ始めているようだ。老化は上から順に、目・歯・足と来るそうで俗に「老化の3点セット」と言われているらしい。

老化が進めばいづれは介護が必要になり、介護は、されるにしろするにしろ、誰もが必ず経験することで、その期間が長いか短いかの違いだけだと先生は話された。

自分が死ぬとしたらどこで死にたいかと尋ねると、ほとんどの人が自宅で、自分の部屋で、自分の布団で死にたいと答える。昔は「悪いことをすると畳の上では死ねない。」といわれたが、現在はほとんどの人が良いことをしても畳の上では死ねず、大体が病院のベッドで死ぬ（在宅死は全体の2割）。そして、介護を受けるとしたら誰から受けたいかと尋ねると、男性は9割が配偶者で女性は自分の娘という答えが圧倒的だ。

ところが実際には核家族化が進んでおり、自分の家で家族に介護してもらうというのが難しい時代に来ている。家族が家で介護出来ないとなるとどこに行くのか。一番最初に考えられるのは病院だ。

しかし、実際には麻痺や傷害は病気ではないので病院は3ヶ月で退院しなければならず（病気であれば継続入院可能）家で見ることも出来ず、病院もダメとなると施設で見てもうしかなくなる。

自分の勤務先の施設である老人ホームの収容人数は70名だが、現在入所希望者が170名いる。老人ホームに空きが出来る理由は、入所者が死亡するか入院するかは少なく、入替えの比率としては年間で定員の1割から1割五分にしかならない。

70名収容の場合は7人から多くて10人しか異動しないので、170名待っているということにはたして、170番目の人は何年かかるのでしょうか。私が思うには、生きているうちにに入れる確率は、年末ジャンボの3億円当たる確率のほうが高いのではないかと。死ぬのが先か、入れるのが先かの問題。そうなると、家がダメ、病院がダメ、施設がダメ、では



どこに行けばよいのかというと、前述のように、介護を受ける本人の大多数は自分の家にかえりたいと思っている。そこで、その為に介護保険が出た。

介護保険とはどういったものか。介護保険があるから老後は安心なのか。（絹木先生は次のように問いかけた。）

「老後はどうだと思いますか？暗いと思いますか？明るいと思いますか？どうでしょうか。皆さん、暗いと思うのは間違いです。暗いのではなく、真っ暗です。本当に真っ暗です。本当にこれで良いのかと疑問に思います。」

介護保険は、強制加入で40歳から加入しなければならないが、40歳から64歳までは、いくら介護が必要と思われても、特定疾病15種類該当者以外では利用することが出来ず、

65歳以上でなければ利用できない。

介護保険は老後の一部を支えてくれるかもしれないが、全てを支えてくれる制度では無い。しかし、無いよりはあった方がよいものではある。

内容としては、現金支給ではなくサービスを受けるもので、段階によって内容が異なり、要支援・要介護度1～5の6段階に分かれている。一番重い「要介護度5」で月額¥358,300相当のサービスが受けられるというもの。具体的にはヘルパーの身体介護が1時間¥4,020で、訪問入浴が1回¥12,500（ヘルパー3人）で、一番重い状態でも毎日お風呂に入ることが出来ない金額しか支給されないものだ。

今後は、介護保険を利用しながら家で介護をする機会が必然的に多くなる。そうすると企業は「育児休暇」と同じように「介護休暇」への対応が必要となる。

日本は世界で一番の長寿大国なので世界から、「介護休暇」などの対応が企業へどのような影響を及ぼすか、またシルバービジネスへの進出や成長などいろいろな面で注目を浴びている。

これからの企業経営者は、高齢化に対する社会制度をどう認識し、どううまく利用するか、介護をどう取り入れていくかが課題になると思う。

（広報 長根記）

介護の実態とその対処法

講師●絹木憲司氏

